

岩手医科大学歯学会第35回総会抄録

日時：平成21年12月5日（土）午後1時

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C棟6階）

特別講演Ⅰ

今、求められているインプラント治療

近藤 尚知

岩手医科大学歯学部歯科補綴学講座
口腔インプラント学分野

歯科インプラント治療（以下インプラント）は、ブローネマルク博士によってチタン製スクリュータイプのインプラントとして開発されたものが、チタン表面の改変と術式の洗練を繰り返しながら、日常の歯科臨床で使用されるまでに普及しつつある。

1965年の最初の症例以来、治療の主体も以下のように変化してきた。1980年代は、可撤式義歯ではなく、固定式補綴装置であるボーンアンカードブリッジを目標とした治療が主流であった。すなわち、顎骨の条件のよい位置にインプラントを埋入することを第一とし、それに合わせて補綴物の形態を検討する外科主導のインプラント治療が広く行われてきた。1990年代に入ると、骨移植を中心とした硬組織および軟組織造成技術等の口腔外科技術の発達によって、最終補綴物を考慮したインプラント治療が可能となってきた。すなわち、最終補綴物を想定して骨量が不足している場合には、骨造成を行うことができるようになったため、短絡的に骨量豊富な部位にインプラントを埋入するのではなく、補綴物の機能的かつ審美的な最終形態を損なわないようにインプラント埋入を行うこと（補綴主導のインプラント治療）が可能となった。2000年代には、ハードウェア、ソフトウェアを含めたあらゆるものが洗練され、診断・治療技術と材料の発展により、かつては難症例と言われたものも日常的に処置することが可能となった。近年は、低侵襲性のインプラント治療（大規模な外科処置を回避したフラップレス、

グラフトレス手術）と、治療期間の短縮（即時修復・早期荷重など）が目標となってきている。すなわち患者のQOLの向上を考慮したインプラント治療が今後は強くもめられ、患者中心のインプラント治療が主流となりつつある。

上記背景から、インプラント治療に求められるものの自体が時代の変遷とともに大きく変わり、多様となった。したがって、患者が第一に望むものが何であるかによって、治療計画の際に設定するゴールは千差万別となる。「豊富な知識を持っ的確な診断を下し、熟練した技術を持って正確にそして安全に処置を遂行する」ことが、現代のインプラント治療に求められる最低条件である。

本講演では、インプラント臨床の現場において、「確実性、安全性、審美と機能」を損なわずに「低侵襲、期間短縮」を図るためのボーダーラインを示すとともに、それを実現するための様々な治療法についても言及した。また、歯科医療センターに新たに設置された口腔インプラント科のシステムについても紹介し、インプラント治療の今後の展望についても考察した。

特別講演Ⅱ

感覚情報処理に関与する中枢神経回路の機能発達

佐原 資謹

岩手医科大学歯学部口腔機能構造学講座
口腔生理学分野

脳のシナプスはどのように働くのだろうか？シナプス伝達の基本となる量子仮説は、神経筋接合部のシナプスにおいて確立されたが、中枢神経細胞間では、そのシナプス前終末の形態の複雑さのため、未だ検証されていなかった。近赤外線領域の光波長を利用した微分干渉顕微鏡